

白骨章

蓮如上人著述

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるにおほよそはかなきものは、この世の始中終まぼろしのごとくなる一期なり
されば、いまだ万歳の人身を受けたりといふことをきかず、一生過ぎやすしいまにいたりてたれか百年の形体をたもつべきや われや先、人や先
今日ともしらず、明日ともしらず

おくれさきだつ人は
もとのしずく、すゑの露よりもしげしといへり
されば、朝には紅顔ありて
夕には白骨となれる身なり

すでに無常の風きたりぬれば
すなはちふたつのまなこたちまちに閉ぢ
ひとつの息ながくたえぬれば
紅顔むなしく変じて、桃李のよそほいを失ひないぬるときは
六親眷属あつまりてなげきかなしめども
さらにその甲斐あるべからず
さてしもあるべきことならねばとて
野外におくりて夜半の煙となしはてぬれば
ただ白骨のみぞのこれり
あはれといふもなかなかおろかなり

されば、人間のはかなきことは
老少不定のさかひなれば
たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて
阿弥陀仏をふかくたのみまらせて
念仏申すべきものなり

あなかしこ あなかしこ

現代語訳 御文章 五帖第十六通《白骨章》

人のいのちのありさまに思いを巡らせてみますと、生を受けてから死に至るまでは、夢か幻のようなはかない一生であります。

永遠に生き続けることができない現実。自分が先か他人が先か、今日なのか明日なのか、あと先は予想できないものです。

その現実には、まさに草木から落ちる雫や、葉先に宿った露が、先を争うように、次々と消え去っていくようなものである。と言われます。

たとえ朝に色艶のよい顔をしていても、無常の風が吹けば、夕暮れには白骨となってしまう誠にはかない「いのち」なのです。

家族や親族が集まり、涙のうちに葬儀を出し、火葬にし、煙と消え果ててしまいますと、ただ白骨が残るばかりで、哀れという言葉ではとてもあらわし尽くせない、悲しみの想いだけが残るばかりです。

人の寿命のあと先は、年齢では計り知れないものです。

だからこそ、一刻もはやく、誰も逃れることのできない、生死の問題を心にかけて、迷いを超える阿弥陀如来の真実の言葉を依り所とした、お念仏の人生をおくることが大切なのです。